

白き蓮華のひらく刻

はじめに 4

春風の刻 9

やってきた男／三帰依／女坂の桜／終わりなき慈悲／父の言葉
花まつり／百一年目の春／沈黙を聞く／あつ、ソウさんや

Sakura Sakura

新緑の刻 63

向こうにあるもの／ない堂／新歓コンパ／王舎城の悲劇
善導大師の伝道／さようならば／スリッパの嘆き
くずめじの道／小判の教え／先生の書齋

朱夏の刻 119

祇園の由来／シャボン玉とんだ♪／同窓生／母の願いと息子の涙
仏法領のもの／一行に遇ひて一行を修す／みおのつくし

松陰の菩提寺／国の根幹／聖人の懊悩

白秋の刻 175

彼岸花／なごりをしくおもへども／賀茂川の秋／夕と口／応病与薬
まねてする／人の闇／自分の殻／もううたいのち／二河白道の庭

玄冬の刻 229

人生最後の日／代わるものあることなし／語り継がれる逸話
道徳念仏申さるべし／花の寒い冬／寄り添いの難しさ
落語のルーツはお坊さん／宝の山に入りて／芬陀利華のころ

おわりに 274

装幀・瓜生智子
挿絵・富永慶

はじめに

白き蓮華とは、インドの言葉で「プンダーリカ」といい、「芬陀利華」^{ふんだりけ}、または「分陀利華」と音写^{おんしゃ}します。白き蓮華は、もともと仏さま^{ほとけ}の慈悲^{じじひ}の活動に喩えられていたのであります。というのも、白き蓮華は蓮の中で最も高貴な花を咲かせますが、芽はドロドロの泥の中から出ています。このことから、仏さまが人間世界の泥の中に入り込んで、しかも泥にまみれず、あらゆる人々を救うという尊い慈悲の活動をされることを、「まるで白き蓮華のようである」と讃えられたのです。

ところが、『仏説観無量寿経』^{ぶつせつかんむりょうじゆきよ}というお経には、

もし念仏^{ねんぶつ}するものは、まさに知るべし。この人^{ひと}はこれ人中^{にんちゆう}の分陀利^{ふんだり}華^けなり
(『註釈版聖典』一一七頁)

と説かれていて、念仏^{ねんぶつ}を喜ぶ人が「白蓮華」^{びやくれんげ}に喩えられています。これは念仏者^{ねんぶつしゃ}が、煩惱^{ぼんのう}という泥の中にありながらも、仏さまのはたらきである南無阿弥陀仏^{もあみだぶつ}をいただき、白き蓮華のように美しい花を咲かせることを讃えられたものです。凡夫^{ほんぶ}の身でありながら、念仏という白き蓮華の花を開くことができるのは、まったく仏さまのはたらきによるからであります。

私が奉職している京都女子大学の宗教部では、六千人余りの女子大生に、仏教精神に基づいた宗教教育を行う一環として、年間七回にわたり、仏教新聞『芬陀利華』を発行しています。それは「白蓮華」のような薫

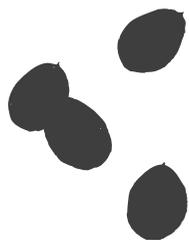
り高い人に育ってほしいという思いから、「芬陀利華」と銘打って発行されているのです。

本書は、その『芬陀利華』に寄稿した原稿を加筆修正したものです。ですので、新聞発行の季節にまとめて、「春風の刻」、「新緑の刻」、「朱夏の刻」、「白秋の刻」、「玄冬の刻」の五章としています。若い学生さん向きに書いたものですので、その点をご諒解いただいてお読みくだされば幸甚に存じます。

平成二十八年 十二月二日

東山の研究室にて著者識す

春
風
の
刻



【やってきた男】

突然の訪問

その男性が突然私の家にやってきたのは、春風の吹く、とある日曜日の夜のことでした。六十代後半に見えるその男性は、「はあ、はあ」と苦しそうに息をつきながら、初対面の私に向かって、

「お願いしたいことがある」

とおっしゃるのです。それは、

「最近、急に亡くなった姉の葬儀をしてほしい」

ということでありました。もちろん僧籍そうせきを持つ身でありますから、葬儀を

することは問題ありませんが、不思議に思ったのは、どうして私のところにこられたのかということでした。そこを尋ねると、とんでもない答えが返ってきたのです。

要約すると、

「自分は、〇〇組の組員であったが、〇〇会との抗争の時に、相手の組員を殺害して、四国の刑務所に長い間入っていて、つい最近出てきたばかりだ。もとはこの近くのAという在所の者であるが、若い頃に飛び出してから帰っていない。一昨日、姉が遠方で突然亡くなったので、火葬はしてきたのだが、何とか葬儀だけでもしてやりたいと思つたので訪ねてきた」

というのです。仰天するような話ではありますが、肝心の私の質問には、何

も答えておられないので、

「どうして私のところに来たのですか？」

ともう一度聞いたところ、はっきりとした答えもなく、どうも要領を得ません。

そこで、

「私より、あなたのもとのお所のAにおられるお坊さんに頼んだ方が

いいんじゃないですか」

とこうと、

「子どもの頃、おばあさんの葬儀をAの在所でした記憶がある」

とおっしゃいます。

「それなら、その方がいいでしょう」

ということになったのです。

男性が、

「先方に電話をして頼んでくれますか」

というので、私から電話でAの在所のご住職じゅうしやくにお願いをすると、ご住職は
こころよく引き受けてくださったばかりか、今から何うというその男性を、
隣の駅まで車で迎えに来てくださるというのです。その男性は、私にひと
しきり礼をいってから駅に向かって行かれたのでした。

詐欺師の手口

それから三十分ほどして、電話がなったのです。受話器を取るとAの在所のご住職でした。